A. Yononaka ni, tayete sakura no nakariseba ;
Haruno kokorowa, nodoke karamaji.

B. Mitenomiya, hitoni kataram yamazakura ;
tegotoni orite, iyedsto ni sen.

女學雜誌第貳拾號目次

官報。文部省令第一號●社說。今日ハ婦人立志の秋●新報。婦人會外數件●叢話。和歌の說(二)。新よめに告ぐ(二)。西洋禮式(第四)西洋料理四十ケ條。瀨川采女の妻より夫に送る文●佳傳。梅香女史の傳附圖。支那烈女傳(一)●寄書。束髮ハ我邦固有の風俗附圖。うめこのきみよ　こたへたいまつる文●諸廣告

四月五日

●文部省令第一號（本年三月二十日官報）

北海道廳府縣

自今當省所轄東京師範學校に於て府縣立師範學校其他公立學校の女教員たるべき者を養成せんが爲めに左の要項に據り生徒を募集す

明治十九年三月二十日　文部大臣　森　有禮

一府縣立師範學校の二箇年以上の課程を卒りたる者を撰拔して入學せしむること

但し時宜により小學高等科卒業生及び之に等しき學力を有する者を撰拔して入學せしむることあるべし

一入學志願者ハ其府縣學務課長及び師範學校長に於て學力品行を檢定證明し之を推薦すべきこと

一撰拔したる生徒の學資ハ東京師範學校より支給すること

但し其旅費ハ自辨すべし

一右生徒卒業の後ハ文部省より其就職地並に俸額等を指定すること

甲　世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

乙　見てのみや人にかたらむ山櫻てごとに折て家づとにせん

女學雜誌第貳拾號（明治十九年四月五日）

●社說

○今日は婦人立志の秋

明治十七年來女權擴張の議論にわかに盛んとなりて昨一ヶ年の如きは何れの新聞紙も何種の論客も皆な一樣に此事に注意し或は日本婦人の憫むべきを說き或は日本婦人の改むべきを論じ開闢以來未だなかりしところの信切はじめて男子の心中に萌ざして婦人社會は維新やうやく成りたる如きの有樣なりき此を以て心ある婦人は志を立てゝ大に成すあらんとし心あるものも尙ほ奮勉して大に勉るところあらんとするに至りたるは吾人の尤も喜悅する所なりき然れども歲改りて明治十九の今年となりては婦人諸君の志を立つべきところその大に奮勉すべきところ吾人の尤も滿足すべきところ更にいよ〳〵切なると覺ゆるなり

龍は空中に飛びゆけりて百獸の王となるものなり然れども雲なければ走るあたはず虎は山野に橫行して狐狸の爲めに威服さるゝものなり然れども風なければ威つよきあたはず龍虎の如き尙ほ然り古來英雄豪傑と云ふものも其の才力を伸ばすの便なきときは空しく池中にひそみ野間にかくれて世に用をなさゞることあり然れば機會は事を成すのたよりにして一と度び之を見れば直に之に乘じ以て已の雲となし以て已の風となし其の才力を伸びんかぎりに伸ばして世の益をはかるは英雄豪傑平常の覺悟なるべし

然るに今まで數千年間男子の下に屈服して眠るが如く死するが如くにありたる日本婦人の先覺となり之を導き之を教ゆるの先進たらんとするぞ所云る婦人社會の英雄豪傑にして尋常一樣の覺悟のよく成し得べきところにあらず而かも此の英雄豪傑のよく事を成さんには必らずや亦たかの機會なるものに注意して其の志をなすの便を得ることに心掛ざる可らず密かに思ふに今日は是れ日本婦人の社會にかの英雄豪傑を要するの時にして亦たこの英雄豪傑の志を成すに便よき機會は即ち正に今日なることを知るなり

ろを何故と云ふに去年十二月政府に大改革ありて森有禮君の文部大臣とならるゝや女權擴張の機こゝに全く熟したり同君は明治六年の比ろ初めて男女同權の論を主張ありたる人にて女權の保護には熱心の聞え甚だ高し吾人は屢ば論ぜる如く決して男女同權なんどゝ云へる空理を主張するものにあらざれば今の文部大臣とは固より意見を異にするの憾ありと雖も然れども數千年間女子婦人を視て人外に置きたるの亂暴時代に居り卓然として

此の議論を述べられたるハ其の理の當否を暫く置きろの女子婦人を保護するの信切に富み玉ふとの一方ならざるを悟り得べし然るに今や吾が文部の大臣に此の婦人女子に信切なる森氏を得たるとなれバ此よりして女流教育の事大に擧るべきハ尤も確かなる希望なり既に女子師範校に官費女生徒を養ふとを布告されたるも今年此頃なり上野れ高等女學校を新設すべきとを布告されたるも今年此頃なり大坂に亦た高等女學校を新設すべきとを布告されたるも今年此頃なり森氏文部大臣となりて既にかくの如く數多の吉兆あり然れバ秋田に於て一旦廢滅に決したる女學校も亦た存するとに改まり福岡にハ新に婦人讀書會を開き岡山にハ婦人原泉會を設け仙台にも亦た婦人親睦會を編む等の好報續々として之れあり婦人教育女子奮發の時機ハ今年此頃に至りて既に全く熟したりと云ふべし

嗚呼多年歐米に遊びて學事を研窮したる洋行歸りの貴婦人少からず東京女子師範校を初として所々の師範校に業を卒へたる女學士少からず東京橫濱西京の耶蘇教女學校に於て學行を練りたる女秀才亦た少からず此等ハ當今女流の改革を任として當に大に奮勉あるべきの人々なり時機已でに今ま熟せり希くハ此を雲とし風として大に計畫するところあられんとを

新報

○婦人會　本号の社説中にも記載したる如く各地方の所々にて婦人の協會追々に開くるにつきてハ日本の大都府たる此の東京に於てハ彌よ以て此の樣の集會大に盛んならんやう希ハざる可らず聞く所によれバ府下にも婦人讀書會或は婦人協會などを名としたるもの所々に之れあるよし本誌も何后ハ成るべく探報して其の景況を示すべしとハ云へかゝる諸協會に於ては亦た本社に惠報ありて各地方の有志婦人へ府下の婦人奮發の有樣を知らする便とされんとを請ふ

○繪畫の改良　前号に繪草帋の道德と題し近來所々の店さきに吊るす繪草帋の甚だ不道德にわたる趣を慷慨したるに此頃より教導立志基と題し古今に有名なる立志談の摸樣を最と高尙に繪がきて簡短なる解説を上に錄したる繪草帋を賣捌く者あるに至れり此れ實に繪草帋改良者中の有功なるものにして吾人ハ深く之を慶賀するものなり尙ほ追々に高尙善良なる繪畫の行ハれて一見たゞちに見るものゝ思を淸よくするやうの繪草帋廣まらんとを切望す

○裁縫通信　英吉利の倫敦府にてはある仕立屋發起して通信裁縫學と云ふとを行ふときく此れハ袴れ裁ち行と學ぶにハ金幾何

上衣の縫ひ方を學ぶには同じく若干と授業料を定て自宅におり乍ら通信にてかの方法と教授する規則のよし甚だ便利なることと云ふべし

○禁酒節酒の會　近來禁酒會節酒會など云ひてかの有害なる酒を飲むことを或は禁し或は節せしむる協會あるに此等に入會さるゝ婦人は思の外に少きよしなり西洋各國にてかゝる會には反つて婦人の入會多く婦人卒先して之に尽力する有様なれば我國にても其れ程とはならずとも切ては早く會員となりてこの有益なる教の追々に廣まるやう万一の尽力あるべき筈なり凡そ夫の大酒に困難する婦人方は決して此等の會を輕ろしく見るべからず

○福岡婦人協會發會の概況　福岡區内(原籍寄留を問はず)有志者は淑女良妻衆より成り立つ福岡婦人協會の發會は昨二十日定刻より福岡橋口町宮城坎一氏の居宅に於て開かれ始めに荻野ひさ女は開會の主旨と役員即ち主事を撰ぶの事とを述べ次に小野きち女は博多北校教員総代として祝詞の朗讀あり夫れより津田利夫氏が「家内學校」てふ題にて今日の婦女子の心得となるべき事柄の演説あり了りて板倉謹二郎氏は無題にて色々婦女子の心得べき事の演説ありて此日の演説了せり夫れより主事の撰み方につき此のたびだけは本會の發起者三十餘名中にて二名を定め姑らく受持ち、程たちて改めて撰ぶ事とすることになりて會員退散の時刻は黄昏の頃なりしよし右二名の主事には荻野ひさ(令閨)田中もと(令孃)の二女史に定りたるよし此日出席せし令孃令閨の姓名(四十五名)は左の如し但し到着順による

原ふさ○能勢とも○大島ほとり○田中もと○庄野そみ○小田部かの○寺田たつ○井上つね○森すゑ○藤野たけ○垣生さか○大島まとか○尾崎ちか○竹森うたきち○太田かも○井上くよ○原田しげ○田中うな○柴田よね○猪野さき○中山さゝ○江藤ちよ○村上きく○小野きち○平野かつみ○松尾ふで○横山ちよ○塚本たつを(以上令孃)不破きよ○神吉てい○神吉なつ○荻野ひさ○宮崎しげ○坂倉さと○甫守そる○野村まさ○津田きち○須田はる○山田きさ○林てる○加藤ゑい○田中なる○堤まき○花房さき○宮城せん(以上令閨)

又當日未だ入會の手續了はらざる人にて會員の紹介により演説傍聽に來りし人々は權藤たけ。渡邊ひさ。榎本はる。の三女なりしと(三月廿一日福岡日々新聞)

○南北兩小學の女教場並に女教師　當區内にて博多南校北校と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

稱する二小學は最も進歩せしものにて女教場の如き昨年中よ本校より距れて更に新築し其教員ハ大抵悉皆婦人を以て組成せり即ち南校教員ハ七等訓導竹森うたきち、田中もと、梶山つね、田中うふ、尾崎ちゑ、大島ほとり、中等補助者岩崎しげ、垣生さか、大島まとゐ、横山ちよの諸女史又北校ハ七等訓導高川くに、山田きさ、荻野ひさ、江藤ちよ、小野きち、中等補助者村上きく、柴田よね、中山さく、猪野さき、初等補助者田中てふの諸女史にて兩校とも取締として男教師二名宛あり右廿名の女教師は荻野女史を除くの外悉皆當區女教師養成所の卒業生よして其補助者の内にハ年齡未滿にて訓導拜命せざる女史もあるべし女教場獨立して教員大抵女史たり同小學の進歩知るべきなり

又た右女教師達ハ本月上旬より火金の二曜日に福岡區會議事堂を借受け師範校の甫守謙吾氏を聘して開發授業並に教育書唱歌等に何れも勉强するよし去る廿七日の同新聞に見えたり

○德基高等女學校　舟木なる德基高等女學校にハ入學を申込むもの近來非常に多けれども現在の寄宿舍にてハ何分狹隘にして入學を許さゞる場合に至らざる由あるが右ハ近〻新築になる都合にて教員をも新たに京都府女學校の卒業生を聘せらる事になる由なり又有志者の盡力にて同校へ寄附金も多分に纒まるべき摸樣なり彼れ是れ居士が如き澤山の女兒を持ちたるものも末頼母敷思ひ居れりと厚狹傳信居士よりの報知（三月廿五日防長新聞）

○女獸醫　歐米諸邦に於ても婦人にして醫を業と爲す者尠からず人々敢て珍奇とせざるのミならず却て之を以て婦女子適當の職業と爲すもの丶如し然るに我邦に在つてハ古來婦人にして醫師となりし者も田舍醫者の寡婦か左なくバ産婆の巧手なる者が纔かに耳學問より習ひ得たる漢方の配劑を爲す位ゐのものに過ぎして絕へて世に名を知られたる女醫師と云ふ者とてハあかりしに爰に山城綴喜郡大住村五十四番戶田宮九右衛門の妻りウ（四十三年七ヶ月）と云へるハ先年來志を立て獸醫學を修め頗る勉强するとの風聞ありしが果して此程に至り全く其目的を達し充分成業せしを以て今度大坂第一回獸醫開業試驗に受驗の儀を出願したる由古來我邦の婦女子にして醫術開業の試驗を受る者ハ實に此のりウ女一人あるのみ嗟呼世の生を男子に禀け然も四肢五官を具備し乍ら空手徒食世間の居候を以て目さるゝ怠惰漢少しく省みてりウ女丈夫に愧る所ろなきか（三月卅日中外電報）

○沖繩島婦人の有樣　當地の婦人ハ活潑にして力量あるとハ内

地と全く反對にて耕作運搬の業より家猪の畜養屠殺賣買等に至るまで都て婦人の手に在りて男子ハ優遊徒食するに過ぎず隨つて婦人の權力強く一家生計の事に至てハ男子ハ決して嘴を容るゝ能ハず金庫の鎖鑰も婦人の管する所たり置縣以來此風習を矯正せんと縣廳にて大に男子を奬勵せられたれども百年の習慣自ら性となり加ふるに婦人の勞力に依りて一家の生計に缺乏を告げざれバ容易に改良の途に向ハずされど男子中にて活眼を開き醫學校又ハ中學校に入り學術を修むる者もあれバ十年の後ハ婦人の養ひのみに賴らざる者も出現すべきか但し其學費ハ勿論婦人の仕送りなり●娼妓ハ那覇首里の兩地にて三千人程ありと云へど詳らかならず是ハ内地の娼妓と全く其趣きを異にし各自に家を有して自ら炊ぎ自ら衣て一家の有樣ハ内地の寡婦暮と稱する者に彷彿たり其主婦ハ二名乃至五名の若き婦人を抱へ置けり其娼妓若し女兒を生むとあれバ大に悦び成長するに及で又之を娼妓となす故に娼妓ハ代々娼妓にして正業に復するとなしと云ふ一孤島の首府にして何故に斯く娼妓の多數なりやと云ふに此地ハ淫風の盛なるのみならず料理屋等の設けあらざれバ男子の遊びにハ必ず妓家に至り酒を飲み絃歌を聞くを無上の樂となし婦人も亦生計の有餘を夫に與へて一夜の春夢を買ハしむるを第一の榮譽となすに因れり甚だ奇と云ふべし（三月廿四日朝野新聞）●遊廓　同地にハ辻廓内と云へる遊廓あり娼館の建築ハ周圍に石垣を繞らし内部の構造も内地の寺院の如し此所に居る娼君ハ身に更紗、八丈、島紹等を着、頭に冠を戴きて田舍廻りの安雛の如き形あり又上等妓ハ水干樣のものを着て寶冠の纓長く結び垂れたるハ昔の白拍子といふものめきて君を初めて見る時ハとても歌ひ出しさうなる景色と云へバ定めて妓王、佛にも似うよひたる靜麗幽艶の婀娜的ならんと思ハるれど實際ハ決して然らず殆ど美醜の評も出來ぬ無塩女のみにて羅綺にだも堪へずとハ衣裳の方から逃出すと云ふ惡口かと思ハるゝ程のものなり實に左もあるべし彼の地にて娼妓の事を牛といひヤマと云ふ馬や鍋と伍をなすにて大抵其實物を推測すべし又藝妓ハ大抵四十五十の老女にて蛇味線を彈じ太鼓を皷つ全く色氣と離れたる純粹の藝妓なるにハ内地のもの忸怩たる所あるべし其他少妓あり此ハ席上舞踏する雛妓なり又女郎屋の樓名も一種異樣にて柳香〻小、掛碁樣、盆香樣など云ふ何等の意義にや毫も解らず斯く異狀變態なる樓に入り妓を擁し弦聲を聞く踏舞を見ながら豚のご馳走にて一杯やつた塩梅ハ隨分愉快のものなるべしと想像せる人もあらんが實際ハ大違ひにて器量の極惡き天人と破れ寺の本

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

堂にて酒宴する趣きあり殊に一種の殺風景と覺ゆるハ此等の諸妓が坐作進退する此間に屢〻青臭き異臭を放つと是れなり土人に問へバ此ハ平生豚を食ふ故に因れりと云へりし（三月卅一日東京日々新聞）

○婚姻の統計　獨逸の首府ベルリンにて昨年中に結婚したる統計なりとて西字新聞に記せるものを見るに總てハ一万三千三百十四人あり其の中に後家にて再縁したるものハ五百六十一人離婚せられたるもの丶再婚者ハ二百二十九人ありて中にハ三度までで離縁せられたる婦人一名あり此の婦人を娶りたるものこそ如何に大膽なれと專ら評し合へり（日本にて三度位離縁せられたる婦女ハ左まで珍らしくあらざるべし又た此の婦女を娶りたりとて誰れも怪まざるべし歎ずべし）いとこどちにて夫婦となりたるものの九十五組叔父と姪との結婚したるもの八組叔母と甥と伉麗になりたるもの二組あり其の年齢の上に就て最も不釣合なるハ二十五年の男子にて六十の老婦と配遇し七十五の老人が尤も愛らしき十五の少女を妻とせし事なり其の他婦人の男子より十五年若くハ二十年長けたるもの五十三組廿年乃至二十五年長じたるもの九組ありて男子の婦人より年少なる三十年のもの一組ありと云へり我が東京などにて若しも斯く明細なる統計をなす者あらんにハ記者も如何に奇怪なる報告をなす事ならんか（三月廿八日同新聞）

○女兒脩身範　日下部三之助氏校、齊藤貞臧氏著、の女兒脩身範三冊は小學尋常科より順次小學高等科に入るの用に供する爲に編成ありたるものにて小學用書にハ適當の書なり法木德兵衛出版一冊各六錢五厘

●叢話

○和歌の説（二）　白河の樂翁公

詠歌大概に情は新しきをもて先とし詞も舊きをたうとむとかきたるが新しきと云ふと知る人まれなり水の流るゝひとつ〳〵に分れバ皆な一滴なり其一滴あつまりて流とある晝夜ながれてつきせず一滴〻〻みなあらたなりされども水の色にことならず水の味もたがハずおなじ水の新らしきなり人ハ新らしきと云ふも珍らしきと心得て人の言ひ出さゞるをとよみてんと思ふは新らしきと云ふ旨趣にハ背けり百首千百首にてもあれ花を雲と見なし雪と見なしてたてたるとて己が誠より涌き出るハ皆な新しきなりたとへバ雨とまがへ煙とまがふるやうに見なせりとてハ實意より涌出したるにあらざれバ新らしきとハ云ふ可らず我が實意より一つ〳〵に出れバ色もかハらず味もことならねども一流〻〻

みな新しき水のごとくなり之を情新しきと云ひたるにて奇珍と云ふにてはなきなり

○新よめに告ぐ　（第拾六号よりつゞく）

吾もまた姪よ問ふやう然らば夫が急がしく物言ひかけたるとき汝また急に返事したるなどの事はなきや。決して御座りません有ても一度二度の上には候ふまじ常に靜かよ返答いたしましたが。成る程靜かにありつらん然しかゝるときは心に不快に思ひて知らず識らず無言に日を消し夫をして汝が心に不快ある趣を悟らせたるなどのことなきや。叔父様まことよ左様の事は致しました。

吾云へらく若し然りしならば夫は汝よりも強よく此の不快なる趣を心に感ぜしならん而してまた汝は一日この不快を思ひめぐらしていよ〳〵心に樂しからず覺え夕とありて夫の他所より歸りたるときは特更に之と接吻せまじと思ひてわざと歸り口に出で迎へずありしともあらん。と云ひしに姪は不思議の顔して吾を見つめたり。吾つゞけて云ふやう汝は必ずかゝることを爲し玉ひしならん一日二日とかく爲するうちに遂には復び接吻することを物うく思ふやうとなれりしならん。此時姪も決して左樣の事候はずとは云ひしが何となく默してありしを見れば遠からざる推察なりしと見へたり

吾尚ほ云ふやう斯て汝はひとり心に思ひて夫何とあらう汝に心を打ち明かさゞれば其身も亦た夫に物云ひかけじとて夫れよりは以前の如く夫の手を握ることもせず夫の肩に手を置き夫の髪の毛を引くなど前には心なくして爲せしことも今は殊更に心をとゞめて自ら爲さゞるやうよ制し斯かることをせば夫は樂しみ玉はじ或は不思議に思ひ玉はんなどと顧慮してすべてなれ〳〵しく爲さゞりしならん。と云ひしに姪も此時叫び出でゝ云ふやう。叔父さま最早や仰せあるな眞にろの通りに候私は家に獨り留守するうちそろの事のみを悲しく覺えて歎きまする私の望むものも最早や私の手のうちには御座りませぬ。とて再びわが肩によりて泣きろゝりたり

吾はとへらく姪よ汝は夫の方にても汝とひとしくまた不快に感ぜてありと思ふや。私は存ぜませねども夫にもしかゝる御不快の感じあらば定めて妾に知らせて玉はることゝ思ひまする。あゝ然らば汝は何故に夫のみを待ちて自らの不快をうちあけ玉はぬぞ汝もしろのやうに色々と物案ずることを止め汝の手を夫の肩にまわして心より接吻せば二人のあいひの村雲はすべて晴るゝと思ひ玉はぬや。眞に左様に候はん然し夫は何故それを爲して玉

れらぬや妾ハうれしと待ちて居りまするものを。然らバあれ夫の愛を失ひて心を痛め乍らこの痛心をよく禁え得てかことを自ら言ふに似たりかゝる高慢にひとしき辛棒をやめて叔父の今ま一言することをきゝ玉へ汝今まより子供らしき愚痴とやめまた自ら痛心にたゆるとの高慢を去り心を大きくして先づ愛情と夫にあらハし汝の心と夫の心とに明るき光を入れ玉へ。此時姪ハ左様に試み候ハんと云ひて稍や元氣よき面地をなしたり

吾れ思ふに吾が婿と姪とハ遠からず元の如く睦まじき中となりぬらん以上記るしたるとれたゞ己が姪にのみならず凡そ世の中の新よめにハ多少の御心得となりぬべき歟とて錄す

右一篇は前にも述べたる如く西洋婦人に敎へたるとなれバ固より直ちに我が國の新よめに用ゆべきものならねども新に嫁して夫の愛をやゝ失ひたる婦人がたあらバよく〳〵此の一篇を味ひて讀み玉へ言バに述べがたき味ある敎この中に存することなり

○西洋禮式（第四）

西洋料理四十ヶ條

近來ハ西洋料理追々に盛んとなり宴會にハ皆な玆に集るやうの景況となりたれバ其の食事心得と學ぶと女流にはいと大切なりよりて吾人のかつて農業雜誌に掲げたるものと増補して玆に其の大概を示す

第一　食卓に就きたるときあまり急ぎて食する勿れ

第二　食物を口一ぱいに含む勿れ

第三　食物をかみ乍ら口を開く勿れ

第四　食するとき口又ハ喉にて音をさせる勿れ

第五　食物を含み乍ら談話する勿れ

第六　食卓を穢す勿れ

第七　食卓上の菓物を他所にもち去る勿れ

第八　食事し乍ら犬猫にたハむるゝ勿れ

第九　食べ乍ら口中に指を入れ又ハ齒などをほじる勿れ

第十　麵包ハ手にて裂き其切口にバタを附けて食し決して庖刀にて切る勿れ

第十一　手を汚し髮を亂して食卓につく勿れ

第十二　自分より彼此と品好する勿れ

第十三　麵包又ハ菓物の只一ツ殘りたるときハ夫を食ふ勿れ

第十四　自分の庖刀にてバタを取る勿れ

第十五　食事中バタ又ハ肉汁にて指を汚す勿れ

第十六　たとひ汚すも口にて嘗め又ハ食卓しきものにて拭ふ勿

第十七　魚の如き軟らかなるものハ三股にて食ふべし庖刀を用うる勿れ

第十八　指に腫物又ハ汚穢なる故障あるに非れバ手袋をはめて食につく勿れ

第十九　皿を裏がへして他の事に用ゆる勿れ

第二十　食卓上に自分の好まざる品あるも之を口に出し顔に見はさゞるハ勿論の事他の嫌ひなる物の話をも爲す勿れ

第廿一　食品の替を望むときハ庖刀又ハ三股とバ麪包の上に置くべし皿の上に載せて出す勿れ

第廿二　食物の中より出又ハ髪の毛など出るときハ之を取出して竊かに皿の縁に置き決して口外する勿れ

此他十八ケ條ハ次号にゆづる

○瀬川采女の妻より夫に送る文

瀬川采女の妻きくと云へるハ貞操のきこえ高かりき人なり夫采女朝鮮征伐の役に軍に從ひて出發したるを戀ひしたひて心の誠を見はしたる玉章と送りたるに便船難にあひて破れ文バこつゐに波上にたゞよひたるを拾ひとり太閤秀吉に獻じたるものありしよ太閤ハ菊の心根をあはれと思し召し瀬川采女をよびもどし玉へりと云ふ其の玉章ハかく名高きものなれど世に見たる人ハ稀れなり今ま社友船越氏より奥平家に寶物として藏め玉ふ彼の節の文のうつしを送り越されたれバ茲にかゝぐ

便の舟をまち得てろゞろゑ筆の立てども覺へたりし候ハねども立わかれまいらせしゟ後人知らずひとりこうるとも胸のけむり晴るゝ間もなきなみだの雨ひとうたならぬおもひのやみに伏し玄づみいつを限りと露の身に消えてぬ間ゑ夢バかりかくぞと知らせ參らせたくうつゝ戸ざしゑ文つぎ硯ゑむかゐる筆のそみもなみだゑながるれバ

行く水にかすかくよりもそかなきハ思ハぬ人を思なりけり

とよみし和歌の古事もわが身の上とあはれゑて中々ろゐ參らせぬむかしのゐひしさ御おしハかり被成たくいかなる神の御引合にてかゝる淺ハかな契とハなり參らせ候哉ゐえやえやうりの習ひ今さらおどろくべき女の身ながら口れーき今しなかく〴〵にうき世に限なき海山をなき身となり參らせ候ぞや扨てたがひに又生れ逢ぬ後の風の便の音信を世に願ひ參らせ候生にさゑ聞まいらせそ候へバ是ハこまもろこしと今一しほのおもひやらんに御渡り候へバおもひのみに○○かねて只だ仮初の引合たまゐし中立をうらみ居る斗にて過し頃夜もすがら語りつくしの手枕にきぬ〴〵となり明がたに

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

身はかくてさすらへねとも君がわたり過しかゞみのかげははなれし」うらみては身をかこち古歌のむし是をかたみとなみだもせかみ作ら殘し置たまひしかたみ誠に袖よりの外にもらすまもなく朝な夕なに打もおかれぬものから夢にさへ見まいらせぬ事のかなしさよ

思ひつゝぬればや人の見へつらん夢と知らせばさめざらましを」小町がよみし言の葉も誰かいたづらのうき世ぞかし

限りとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり」誠や自らかゐなきいのちながらへ一度あひ參らせんと思ふにつけて仇なる露の玉の緒も長かれとばかりいのるのみもろこしへ行く舟をまたひみぎわになしまづみ松浦佐代ひめがおもひも今の我身に増り候半や何事もあわれと覺めしくだされ候はゞ御うれしくおはしまし參らせ候申度事どもは四方にも余り候斗りにて候へどもあわたゞしく出船のよし申候へば殘多く書とゞめ參らせ候目出度かしく

くりかへし其后の御ゆかしさは如何なる折節にか露よも承はり候半や餘り人目もはづかしくつゝむ涙のこぼるゝをおろほる袖もくちはてゝやつるゝまゝの戀衣きそゆえかくと思ひ〳〵てへば我ものながらなつかしくたへ出やらぬ寐やのうちなちと成る斗りにて候へば

かくならん行衛も知らで賴みつる我こゝろをば誰にかたらむ

書おくる我手ながらもうらやまし戀しき人の見るとおもへば

此歌自分思ひこがれし心のうち筆にまかせ候御そもじさま御うへ置たまひし花今ほど彌生中頃の御事に候へばうつくしく咲亂れて御そもじ樣のかた身と朝夕詠入〳〵ちり候はゞ何と便に心をなぐさめ候半やとうちなげきよなく〳〵あけぬれば花をちらすあらしをうらみくるればねやの内に入れまくらとしていとさらに目もあはず人目を忍び花園に立ち出れば夜もすがら月を友としひとり心をすましかなしきと御すいもじ玉はり候へかし出船にていろぎしまゝ文の次第も違ひ〳〵古年如月もうちすぎやよゐ十八日にうつくしき姫をもふけ〳〵晝はひざの上夜もすがらはざをはなさぞろもじさまと添ひ參らせ候心地にてそだて〳〵夜も夜も同じ世に住ながらのよなに遠き海山をへだて明くれ心ぼそく我身のうき命つゆとも消候はゞやがて目出たく御歸陣のたりなしには姬をみづからのわすれがたみと御覽被下

べくおわれ〳〵たがひに玉の緒の長くおハしまし今一と度御目にかゝりつもる御事どもかたりつくし申度候十四才よりいと仮初に枕をならべいまだ三とせにも成り候ハでかよふに行分れまゐらせ事いかなるむくひぞとがなき神佛をかこち申ばかりなりてまし〳〵申度候へども紙筆につくしがたく候まゝ先々筆をとゞめまゐらせ目出度かしく

此の玉章は即ち菊より采女に送りたる心のうつしなり斯斗り夫を戀ひ慕ふ愛情ハいと〳〵感ずべきことなれども茲に妻たるものゝ心得べき箇條あり若し朝鮮にて軍馬の間に奔走する夫之を見なバ勇氣をさらに鼓舞して功を太閤殿下の爲につくそ決心をいよ〳〵増すべきや否やと云ふこと妻たらんものゝ初に思ひめぐらすべきことなり東西万里をへだてゝ戀したふ夫にわかる一日も早く相見へたきハ人情の常なりとハ云へ既に國事の爲に遠征する夫なれバたゞ其心をなぐさめ又た其の勇をはげますやうの文を送るこそ貞女の心得なれ太閤此の文を見て采女を召び戻し玉ひしハ一朝の樂みかぎりなきやうにはあれど功を万世に垂れ忠を君主につくすの機を得させざることゝなりたるも眞に妻たるものゝ喜びならんや左れバ菊が夫を慕ふ愛情ハ人々のよく學ぶべきところなり文のかきざまハ決して賞むべきことにあらざるべし本誌第十六号にかゝげたる木村長門守の妻より夫に送りて戰死を促すの文ハ反つて貞婦烈女の學ぶべきかき方なるべし

●佳傳

○梅香女史の傳　　月の舍主のぶ

第六　隱れてハもるゝ心の文
もれてハ光ゆる夏の月

此の傳紀ハ第五回と本誌の第九号に掲げたる以來止を得ざる事情ありて暫く筆を止めたるに尚ほ餘るを繼ぎて出さんやう催さるゝ方も尠なからねバ此度また思ひ起して本号より掲げ出すことゝなりぬ

梅は卒業式ありし日に秀才の演説を聽しより斷えず物思ふ姿なりしが此時まで居常昂々として谷に臨む大鳥の景色ありしに之より急かに一變して最と身を安んぜざる風となり時々は思に沈みてろく〳〵に人の話すにも答えざりけれバ松本孝ハ早くも之に心付きていとあやしみ乍ら何事をか思ひわづらふらんと案じつゝ折にふれて言ひなぐさむるともあれどたゞ唯々とばかりに聞きながして心の底を打ち明くることもなかりけり友を懷ふて情ふかき孝の心には如何にもして梅が氣鬱をなぐさめんとの信なれバ此夜ハゆるやかに月を愛めて夏の夜の涼みせんと母の許を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

得て梅の寄寓そる大家ゞのりへ訪ひ來り今しも木立物ふりたる庭に出でゝもろともに流れ行く中天の月を望みろよくと吹く夏の夜風に團扇とる手をわすれて靜けき思を言の葉にいひかはしけり」松本さんこの月と御覽なさい古今東西の人々は皆なその時々に賑め見て思ひ〳〵の心と寫しましたらふに斯く照りわたりて一点の曇もなく鱗なす雲の色を白くさして流れ行わりさまハ實に此上なく清いジヤ御座りませんか若し之にて妾の心の中を照らしたらバ如何でせう（松本）靑山さん貴方ハ此頃何となう物を案じなさる摸様ですが何事をそのやうに煩ひた

まふか斯く親しく交れる私に秘くし玉ふもまことに怨めしう覺えまする(青山)イヘ何事も心配ハ御座りませんが月を見れバ物がなしく花を見れバ心地すぐれず前にハ樂しう覺へましたるものが今ハ皆な心を重くするやうになりまして自分ながら不思儀に思ふ斗りです(松本)サうれに何か因縁がありませう姉妹の約ハ致しませんが心にハとくより盟をかはしたるものに何故かくまで秘め玉ふや(青山)自分に秘するとならバ申ますが秘するとでありませんから申さうやうがありません只だ此間の卒業式に演説を聽きましてから此迄の心根を去りわが身乍ら行過たるとの多かりしならんと愧かしく思ふ心バかりと考へます(松本)ソレと左程に案じ玉ふはちと可笑しひじやありませんか然し私も彼の時ハ實よ感服いたしました(青山)左樣でせう實よ高論に吾が心を刺きましたかの方ハ何と名り玉ふか貴方は御存知ですか(松本)アヽ貴方ハまだ御存知ないの彼の人こそソレ去年米國より歸りて有名の書を著し名を揚げ玉へる文部省の秀才(青山)アヽ左樣ですのソシテと云ひうけたるが辞をかへ時に今夜はお互にゆるりと心中を話しあふといたしませう貴方ハ最早や來年が卒業ですが卒業后はドウなさいます(松本)私ハ御存知のやうに一人の老母がありますゆゑまづ之に安心させるやうに至すとが大切ですから善き口でもありますれバ教師にもなりたう存じまするが田舍に行くなどのとハ母が好みますまい左すれバ東京よソウ好い所もありますまい假令ひ一時學文をすてゝ裁縫洗濯などをいたしまするとも少しも苦勞とハ覺にません只だ望む所はドウぞ日本の婦人に有益な書物でもときぐ世に出すやうに致したいと思ひます(青山)ソウデスか然し秀才學士に嫁ぎ玉はゞそれ程よ苦勞も入りませうまい(松本)ホヽ(青山)貴方は到底人に嫁し玉ふならん(松本)左樣でせう(青山)人間生れて婦人と爲る刎れ百年の苦樂他人に委すと云ふ若し知人ならバ百年の委托も宜しけれど知已なければ寧ろ獨立するこそ宜しからん(松本)貴方ハ定めて知已がありませう知已にそふて共に事を爲し玉ふとき如何なる事業を爲したいと思し召すか(青山)左模です若し夫として國事に奔走せしめ朝に出でゝハ百官の上に立ち家にありてハ有志の士人に交り名聲世にたかくして四民の木擇となるに至らしめ私もその万一を補ふを得バ實に喜びで御座りませうし斯て此の夜松本孝ハ母の許もあれバ遂に梅の許に一宿して伏戸を共よし更たくるまで語りつゞけたるに落月まどよりさし入りて木立よろよく風のみ音したりける

○支那烈女傳　(一)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○孟子の父激公と云へるハ三才の時に死し玉ひければ其母仇氏即ち世に孟母と云へるもの養ひ玉へり孟子人となり學びて家に歸りたるとき母とひて學文如何ほどに上達したりやと云へるに孟子はもとの如くハかくしらぞと答へたれバ母は刀を以て織りかけたる機を斷ち汝もし中途に學を廢せバ恰かも此の如く何の用にも立ちがたからんと云ひしより孟子大に感激し旦夕勤學して遂に大賢となりたり

○後漢に樂羊子と云へる人ありある師につきて學文すると一年にて家に歸りければ妻あやしみて何故ぞと問ひたるに久しく家を離れて思に切まりたるゆゑと答ふ妻乃ち刀を以て機を斷ちはげまして云ふやう此れもと少さかの蚕一糸を吐きたるを累ねて寸となしまたつみて尺となし已まざれバ遂に丈疋の布となるなり吾夫もし學を積みて止み玉ハずバ懿なる德をなし玉ふべしもし中道にて御歸りあらバ妾がかく之を中斷するに異ならぞと云羊子大に奮發し再ひ出て七年歸らず遂に大業を終たりとぞ

●寄書

○束髮ハ我邦固有の風俗

束髮の人身に有益なる事ハ其說一たび出しより世間の贊成を得て稍〻束髮の風俗に傾向せんとの勢ひなりしがいかなる事にか

倭姫命天照太神を伊勢の國に齋奉る御姿

神功皇后三韓征伐之時御姿

ありけん近來ハ其跡を斷たるゞ如し其利害得失は是まで諸新聞にも懇論されたれバ今更喋々するに及バざといへども可惜利益を水泡に歸そるハ實に遺憾なり抑も束髮ハ我邦古來の風俗にして取も直さず復古の美事なれバ一日も早く改良いたし度事なり余嘗て或る好事家に藏せる復古の繪卷物を見るに上は皇妃より下萬民にいたるまで皆束髮なり其形狀ハ少しく異なると雖も何憚る所ありて世間の姉妹たちハ逡巡せらるゝや今其圖の一二を畧寫して參考に備ふ願くは速に復古の風俗に改良せられん事を

備中　川野生

○うめこのきみに　　　こたへたいまつる

なにも　　やまとおつ女

きしや　ざつし　だいじふハちがう　すなハち　さんぐわつじふごにちの　きしよ　らんないに　ゆきのや　うめこれ　きみの　ミこたへを　かゝげられたるを　うかゞひ　たいまつれバ　さいつごろ　おのれが　つたなき　ふでもて　おもふ　ふしぐを　まをせしを　ミこゝろにとめたまひて　かくれものしたまへるにころ　ろのふしのなかに　おのれが　まをせしことの　がんもくを　おもひ　たゞへさせたまへる　ふしあるをひとつ　ふたつ　まとすべし　まづ　かミのゆひかた　いへゐのたてかたを　かれよ　ならふを　ことぐゝに　よしとのた

垂仁帝の御宇民間の女子手端と貢献そる圖

まへるは そこしかたよりし あげつらひ なるべし そのしるしは かかねがみも おのづから わがくにの ふうぞくあるべし いへゐも おのづから わがくにの よろしきふうあるべし ちかごろしんぶんしにて みれば あめりか いぎりす そのほかの くに〴〵 にても にほんのいへゐ うつれより きものまで はやりゆける ところもありと かけるをみるこゝろみに かうべの みなとに ゆきてみたまへ えいわによがくかう なんどは もくせいにして のきぶかく にほんのふうを にせたる ところあり おのれ したしく かのくにの くすしに きゝたる ことあり わがくにの いへゐのたてかた のきふかくして もくせいのものは なつのあつさを しのぐに よろしといへり これにてれんぐわ づくりなどは ゑいせいに よろしからぬを しりたまへ たま よろづのこと よきにすすみ あしきをすつるは ひらけゆくよの たまものにて くにのひかりは そふなれども みたまへいしんのとき かろ〴〵しう あらためたまひし ことをさへ これほどは ふるきに かへさせたまへる ことといとおほかり いにしへのめいしよ きうせきを ほぞんすること こきぶつ たま こだいの にほんゑども たふとむこと う

しとけれど ふるき みさゞきなどを しゆせんせらるゝこと そのほか ちんだいへいの そしきみなとつくにゝ とらるゝやうなれども すべてわがくにの ふるきふみどもを かうがへ あはせて いにしへに もとづき いまにてらし ことくに〴〵の よきをとり あしきをすつるは まをすまでもなく すべてのことみなかくぞあらん はた きみが かくまでうつりゆくに なほわがくには あまつみかどの おんおきて いくよろづよの すゑまでも かはらぬならんとは いともそのこゝろ えがたし とおるくだり きみには たゞそとのよそほひのみ こゝろとめて うちの まごゝろをおもひたまはぬにや おのれが かざらぬと まとせしは うしとくも すべらみくにの こくたいにて そとの よそほひころ ときにつれつゝ となり かくなり かざりもせめ わがひのもとの みくにぶりの おほづなは かはること あるべからず よろづのこと いとはやりかに ひとよりさきにゆかんとして おのがあしもとに ものありて つまづくをしらぬが わがくにびとの つねのならひなれども たしかにいにしへを おもひて いまにてらし かうがへ たらんひとは たまその あしもとを よくみてこそ あゆむべけれ

とにかくに　ほかれよろしひに　こゝろとられ　うちれまこと
をうしなへることあらば　すゝむともまた　しりぞくべし
つゐねがはも　このとほりに　おなじかるべし　ちうしんは
ろのこゝろよき　うちのまことより　かんじて　つかねたら
んよは　ひゞにときて　きよくもせめ　いへゐも　またしかり
ぬりかくしれむげやそき　あめかぜに　たへやらで　ところ
まだらに　かべのおちたる　やうなうの　いへゐよりも　こゝ
ろきゝたる　ほがくにあうの　たてかたころ　めやすけれ　し
くにのために　をしへごをも　よきにみちびけかしとの　あつ
き　みこゝろぞへ　かしこまりて　うけたいまつりぬ　おのれ
いたゞ　くにのために　みをもこゝろをも　つくそべき　なぞ
のひとの　はゝとなるべき　をとめらを　ひとりにても　れな
したてんと　ひゞに　あゝろにしめさならへども　もとより
つまなき　おいのしなれば　おもふにまかせず　ほかくさの
しゑながき　おんしには　なほひとしほに　しあふろと　いれ
たまひて　はらかられために　まことをつくし　たまへや　あ
なかしこようなき　おいの　くりことゝな　おとしめ　たまひ
ろ

廣告

一弊社ト萬春堂ハ本局支局ノ名義有之候得共是ハ全ク賣捌上ノ都合マデニテ經濟其他全ク關係無之候處看客中ニテ往々萬春堂ト弊社ハ同社ノ如ク御思召ス向モ有之事務上甚ダ困雜仕候間以後弊社ヘ御注文ノ分ハ代價ヲ弊社ヘ萬春堂ヘ御注文ノ向ハ同堂ヘ御拂込ミ被下度弊社ヨリ發送ノ分ヲ萬春堂ヘ又タ同堂ヨリ發送ノ分ヲ弊社ヘ御送金被下等ノヿ無之樣万々御注意相願度此段奉希上候

一弊社今般一層事業擴張ニ付活版所ヲ新設スルノ計畫アリ付テハ次号ノ發兌ハ定期ヨリ四五日間延引致スヤモ難計候間此段前以テ御斷リ置キ候尚又タ第一号ヘ公告仕リ候婦人改良論ノ點取文モ早速掲載可致筈ノ處不得已事情アリテ遲滯仕候段奉謝候右ハ廿一〇廿二〇兩号ノ內ヘ附錄トシテ刊行仕筈ニ付御投文ノ諸君ハ同号ノ發兌ヲ御待チ下サルベシ但シ第二回ノ點取文題モ同号ヘ相掲ゲ可申候

一看客諸䄇ヨリ御惠投ノ詩文歌句等机上ニ堆積致シ候得共何分紙數ニ限リ有リテ急速掲載仕難ク每号順次ニ登錄可致候ニ付左樣御承知可被下候〇女學雜誌代金ハ別段御催促狀差出シ不申共前金相切レ候向ハ至急御廻金有之樣御取計ヒ可被下候

右報告候也

女學雜誌社

演說著作材料新誌　一冊定價十錢　每月一冊發兌　全國無遞送料　第貳號欄目

今の學風改めざる可らざ〇學海珠玉〇新聞の濫觴外拾五件〇文檀一枝〇法律の解釋外拾五件〇人事瑣談〇友の爲に死す外拾二件〇名章華言〇三拾二件〇雜錄新話〇日本文學史外四件〇諸廣告

發行所　東京本鄉弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

●文學叢誌大改良

三月廿三日第十一號發　一部五錢　郵税一錢　十部前金五十六錢

從來文學叢誌ノ旨趣ハ和漢文章ノ淵奥ヲ究ムルニアリシト雖豈之レヲ以テ本誌發行ノ素志トセンヤ只ダ之レ止ムヲ得ザルノ事情アリシヲ以テナリ然ラバ即チ素志ヲ發スルハ果タ何ノ時ヲカ期セン茲ニ本誌第十一號ハソノ素志ヲ達スルノ好時機ニ逢フヲト云フベキカ六大家諸君ノ翼賛ヲ受ケ文學熱心ノ諸君之レガ著譯編緝ノ任ニ當リ今ヨリ全ク紙面ヲ一掃シ舊套ヲ洗脱シ

一大改良

ヲ加ヘ更ニ我邦文學上一層ノ光輝ヲ添ントシ紙上論説ノ如キハ各大家ノ明論卓説政治ノ如キ法律ノ如キ經濟ノ如キ哲理ノ如キ宗教ノ如キニ至ッテハミルスペンサー、ヲ始メトシ、ルーリー、ギリー、パウイン、ホウセット、リカルドー、アダムスミス、ペンザム、ナピール、モンテスキュー等ノ諸大家ノ著書大學中學ヲ始メトシ學士會ヤ教育會ヤ經濟會ヤ其外慶應塾ヤ同人社ヤ佛學塾ヤ專門學校明治法律學校東京法學校ヤ各ソノ專門所長ニ付諸大學ノ講述ヲ載スルモノアリ亦譯載スルモアリ尚和漢詩文俳歌時出ニ至ッテハ和漢諸先生ノ輔助ヲ仰キ雜報雜錄寄書中告等ハ看客諸君ノ御愛顧ニヨリ或ハ時々怪畫ヲ加フルモアリ英學ノ如キハ英米人ノ被見ヲ以テ初學ノ便ニ供ス苟モ文學上ニ關係アランハ局端ニ止マルナク公同共利ノ衡ニ當リ各隔靴ノ感ナカラシムベシ其看官ニ遇スルノ切ナル古今未ダ見ザル所也見本ハ六錢封入アッテ玩味アレ

叢誌擴張ニ付左ノ所ニ轉居ス

發行所　東京芝田村町十六番地　**文學叢誌社**

●男女必讀 **思ひのかけはし**　實價郵税共金十錢

右ハ題號に呉かさる面白き册子あり

發行所　東京南紺屋町十六番地　**新井宇吉**

我會の事務所ハ是迄京橋區山下町に有之候處此度都合により左記の場所へ轉じ候間此段廣告候

麹町區有樂町三丁目二番地　**かめのくてい**

●東京教育新誌廣告

每週水曜日發行　定價金貳錢郵税壹錢　三十回前金郵税共八拾貳錢

本紙ノ創刊ハ實ニ明治十六年ニ在レバ其ノ是非好惡及ヒ信用ノ如何ハ既ニ世人ノ知ル所トナレリ即今三月十七日ヲ以テ第百十四號ヲ發行セリ其目次左ノ如シ

●教育ニハ　貴族少年論

●學科ニハ　漢學(文章軌範講義)　英學(數字ニ關係シタル言葉ノ事)　植物學(植物ガ牛肉ヲ食フ話シ)

●問答ニハ　烟草功害ノ事○小數点ノ事○東京師範學校生徒行軍日誌○理學ノ泰斗ニユートン之傳譯

●雜報ニハ　教育及ヒ學術上ノ報知學校ノ變革通信等凡ソ要須ノ報告十數件

●問題ニハ　數學其他ノ雜件

社告ニハ　廣告廢止ノ件等

以上掲載ノ概畧

東京芝區城山町四番地　**傳習社**

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）	巖々堂
東京神田區雉子町	團々社支店
同　神田區佐柄木町	東海堂
同　日本橋區新政出	頁明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同　京橋區木挽町壹丁目	萬字堂
同　京橋區銀座二丁目	山口福松
同　本鄉區元富士町	盛春堂
同　本鄉區春木町二丁目	解明堂
同　牛込區肴町	活神堂
大坂備後町四丁目	岡島支店
東京芝西久保櫻川町（支局）	萬春堂

發行所　本局　東京本鄉區弓町壹丁目廿番地　**女學雜誌社**

持主兼印刷人　瀧田正義

編輯人　近藤賢三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

從來文學叢誌ノ義單ヘニ和漢文章ノ淵奥ヲ究ムルニアリシト雖豈之レヲ以テ本誌發行ノ素志トセンヤ只ダ之レ止ムヲ得ザルノ事情アリシヲ以テナリ然ラバ即チ素志ヲ發スルハ果タ何ノ時ヲカ期セン茲ニ本誌第十一號ハソノ素志ヲ達スルノ好時機ニ逢フト云フベキカ六家諸君ノ翼賛ヲ受ケ文學熱心ノ諸君之レガ著譯編緝ノ任ニ當リ今ヨリ全ク

一大改良

ヲ加ヘ更ニ我邦文紙面ヲ一掃シ舊套ヲ洗脱シ學上一層ノ光輝ヲ添ントシ紙上論説ノ如キハ各大家ノ明論卓説政治ノ如キ法律ノ如キ經濟ノ如キ哲理ノ如キ宗教ノ如キニ至ツテハミルスペンサー、ヲ始メトシ、ルーリー、ギリー、パウイン、ホウセツト、リカルドー、アダムスミス、ペンザム、ナピール、モンテスキユー等ノ諸大家ノ著書大學中學ヲ始メトシ學士會ヤ教育會ヤ經濟會ヤ其外慶應塾ヤ同人社ヤ佛學塾ヤ專門學校明治法律學校東京法學校ヤ各ソノ專門所長ニ付諸大學ノ講述ヲ載スルモノアリ亦譯載スルモアリ尚和漢詩文俳歌時曲ニ至ツテハ和漢諸先生ノ輔助ヲ仰キル雜報雜錄寄書中告等ハ看客諸君ノ御愛顧ニヨリ或ハ時々怪書ヲ加フルモアリ英學ノ如キハ英米人ノ被見ヲ以テ初學ノ便ニ供ス苟モ文學上ニ關係アラン限リハ局端ニ止マルナク公同共利ノ衡ニ當リ各隔靴ノ感ナカラシムベク其看官ニ遇スルノ切ナル古今未ダ見ザル所也見本ハ六錢封入アツテ玩味アレ

叢誌擴張ニ付左ノ所ニ轉居ス

發行所

東京芝田村町十六番地

文學叢誌社

●男女必讀 **思ひのかけはし** 賣價郵税共金十錢

右ハ題號に背かさる面白き冊子あり

發行所

東京南紺屋町十六番地

新井宇吉

我會の事務所ハ是迄京橋區山下町に有之候處此度都合により左記の場所へ轉じ候間此段廣告也

麹町區有樂町三丁目二番地

かなのくわい

三十…回前金郵税共八拾貳錢 …錢郵税壹錢

本紙ノ創刊ハ實ニ明治十六年ニ在レバ其ノ是非好惡及ヒ信用ノ如何ハ既ニ世人ノ知ル所トナレリ即今三月十七日ヲ以テ第百十四號ヲ發行セリ其目次左ノ如シ

●教育ニハ 貴族少年論

●學科ニハ 漢學（文章軌範講義） 英學（數字ニ關係シタル言葉ノ事） 植物學（植物ガ牛肉ヲ食フ話シ）

●問答ニハ 烟草功害ノ事○小數点ノ事○東京師範學校生徒行軍日誌○理學ノ泰斗ニユートン之傳譯

●雜報ニハ 教育及ヒ學術上ノ報知學校ノ變革通信等凡ソ要須ノ報告十數件

●問題ニハ 數學其他ノ雜件

社告ニハ 廣告廢止ノ件等

以上掲載ノ概畧

東京芝區城山町四番地 **傳習社**

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌） 巖々堂

東京神田區雉子町 團々社支店

同 神田區佐柄木町 東海堂

同 日本橋區新葭町 頁明堂

同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂

同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂

同 京橋區銀座二丁目 山口福松

同 本郷區元富士町 盛春堂

同 本郷區春木町二丁目 解明堂

同 牛込區肴町 活神堂

大坂備後町四丁目 岡島支店

東京芝西久保櫻川町（支局） 萬春堂

發行所 本局 東京本郷區弓町壹丁目廿番地 **女學雜誌社**

持主兼印刷人 瀧田正義
編輯人 近藤賢三

驛遞局認可
明治十九年三月二十五日發行
毎月三回發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY